



Title	教材「地図をいろどる」考(3)
Author(s)	佐野, 比呂己
Citation	北海道教育大学紀要. 教育科学編, 63(2): A1-A16
Issue Date	2013-02
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/6894
Rights	

教材「地図をいろいろ」考（3）

北海道教育大学釧路校国語教育講座

佐野 比呂己

概要

本稿は、「教材」**「地図をいろいろ」考（1）」**及び「教材」**「地図をいろいろ」考（2）」**に続くものである。本稿では、原典『蘆の芽』と教科書本文の異同を確認するとともに、本文の大意、文章構成について考察した。また、教科書頭注、及び教師用指導書の語句解説を整理し、本文を読む上で有効となるであろう語句、表現について解説を加えた。教材として「地図をいろいろ」を研究する上で、その前提としたい。

「教材」**「地図をいろいろ」考**について

本稿は「教材」**「地図をいろいろ」考（1）」**、「教材」**「地図をいろいろ」考（2）」**に続くものである。「教材」**「地図をいろいろ」考**」は次のように構成されている。³

一	教材「地図をいろいろ」	
二	筆者・鍋木清方	
1	教科書、及び指導書	
2	事典等	
3	鍋木清方年譜	
4	日本画と清方	〔以上（1）〕
5	随筆と清方	
三	原典『蘆の芽』	〔以上（2）〕
【資料】	教科書教材本文	〔（1）〕

四 原典と教科書の異同

本文の原典『蘆の芽』は、旧字旧仮名が用いられている。旧字旧仮名遣い以外に、いくつか異同が見られる程度であるが、表記に関しての異同は多々見られる。尚、【】内の漢数字は教科書教材本文の頁を表し、冒頭の○数字は行数を表す。異同のある部分は原典『蘆の芽』の該当部分をゴシック体とした。この異同表は、教科書の記述からだけでは理解しえない随筆「地図をいろいろ」の真意に迫る基礎資料となるものである。

本文の原典『蘆の芽』は、旧字旧仮名が用いられている。それ以外に、原典との大きな異同はないが、表記・表現に関して左記のような異同表を作成した。

異同のある箇所については、ゴシック体、及び波線を使用した。○数字は該当頁の行数を示す。

この異同表は、教科書の記述からだけでは理解しえない随筆「地図をいろいろ」

どる」の真意に迫る基礎資料となるものである。

●原典・本文異同表

原典『蘆の芽』

教科書『国語 高等学校一年上(高等学校第一学年前期用)』東京書籍

【一六頁】

地図を彩る

三 地図をいろどる

楠木清方

ある晩珍しく約束の客もないので、早く食事を済ませてから、私は茶の間の電燈を手元近くまで下して、大きい食卓の上に拵げた数枚の五万分の一の地形図を、赤と青の二本の色鉛筆で彩りはじめた。傍で夕刊を読みながらちよいちよい横目で見てゐた妻は、新聞を下に置くと一緒に、「恰まで小学校の生徒みたいですね。」と笑ひながらその内の一枚を取り上げて、静脈と動脈と交々通へるにも似た、陸路・水路の縷いとの如きを辿つて眺めてゐる。

云はれて見れば、これは寔に幼げな手すさびで、嘘にも絵の道で何の某とか云はれるものが、細い線と線の間を食はみ出さないやうに、塗りにくい色鉛筆を覚束なく擦

- ① ある晩珍しく約束の客もないので、早く食事をすませてから、私は茶の間の電燈を手元近く
- ② までおろして、大きい食卓の上にひろげた数枚の五万分の一の地形図を、赤と青の二本の色鉛
- ③ 筆でいろどりはじめた。かたわらで夕刊を読みながらちよいちよい横目で見ていた妻は、新聞
- ④ を下に置くといっしょに、「まるで小学校の生徒みたいですね。」と笑ひながらそのうちの一枚
- ⑤ を取りあげて、静脈と動脈とこもこも通えるにも似た、陸路・水路の糸筋のごときをたどつて
- ⑥ ながめてゐる。
- ⑦ 言われてみれば、これはまことに幼げな手すさびで、うそにも絵の道でなんのなにがしとか
- ⑧ いわれるものが、細い線と線の間をはみ出さないやうに、塗りにくい色鉛筆をおぼつかなく

【一七頁】

りつけてゆく形は、凡そ似つかはしくないものに違ひあるまい。併しやつてゐる当人に見れば、只単に気紛れな物好きでばかり、鉛筆を弄んでゐるわけでもない。

近頃私は東郊葛飾一帯にひどく興味を惹かれてゐるので、この日も朝のうちに上野のデパートで買つて来た、武蔵・下総・常陸に亘る五万分の一の地図の墨一色摺ずりものが、老眼にはごつちやになつて見にくいところから、先づ水陸の別わかちをつけようとして、河の流れ、湖水や沼を青い色鉛筆で塗り出したのが始まりで、それから一度通つたことのある路を赤鉛筆で印づけて行つたのだが、かうして僅かに水のあるところを明らかにしただけで、地図の表は俄に生き生きとして来て、墨摺のままの時とは恰で別な

- ① すりつけてゆく形は、およそ似つかわしくないものにちがいあるまい。しかしやつてゐる当人
- ② に見れば、ただ単に気まぐれなもの好きでばかり、鉛筆をもてあそんでゐるわけでもない。
- ③ 近ごろ私は東郊葛飾一帯かつしかにひどく興味をひかれてゐるので、この日も朝のうちに上野のデパ
- ④ ートで買つてきた、武蔵むさし・下総しもとうま・常陸ひたちにわたる五万分の一の地図の墨一色刷りのものが、老眼
- ⑤ にはごつちやになつて見にくいところから、まず水陸のわかちをつけようとして、川の流れ、
- ⑥ 湖水や沼を青い色鉛筆で塗り出したのが始まりで、それから一度通つたことのある道を赤鉛
- ⑦ 筆でしるしづけていったのだが、こうしてわずかに水のあるところを明らかにしただけで、地
- ⑧ 図の表はにわかにいきいきとしてきて、墨刷りのままの時とはまるで別な働きを示すやうにな

働きを示すやうになつたことはちよつと思ひの外なことであつた。それは譬へば、新しく出来た運河に始めて水を堰き入れて落したらかうもあらうかと思ふやうな、奔流の瀬となり淵となり、低きについて流るる形は曲行紆余して窮まるところなく、変幻自在の水の文、それは貧しい主観でもものの形を画く絵画などでは、所詮見出すことの出来さうにもない流動の美しさを感じて、宇宙の自づからにして成るものは、どうして恠うも無理がなく、蟻りだの、滞りだののない、立派な線条が成り立つのかと、青鉛筆の手を控へてしばらく見惚れてゐたのであつた。

盤に水を湛へて、墨や紅を水面に落すと色が散る、それへ紙を浮かしてその文をうつし取

つたのを、紅流し、または墨流しと云つて、古くから料紙に使はれてゐる。地図を彩る水文は宛もそれによく似てゐる。

飛行機から撮つた写真には、この水流が真っ白に写つてゐて、曲線の巧みを面白く見せてゐるが、これは卓上に地形図を眺めるより更にほんもの大観に接するのだから何層倍の美を感じ得るわけで、飛行機の旅をした人には、今更色鉛筆で水流をゑどつて、ながれの美しさを讃へるの迂を嗤はれるかも知れない。

総武の平野には大小あまたの湖沼がある。小さいのは忘れ水のやうに、大きいのは湖が却つて島のやうに見えるのもある。柄鏡を落したやうに小さく見えるところにも、地図に載つてゐるほどならば、舟を泛ぶには足るのであらうし、あかるい月も飛ぶ雲も、影を水の面に映すのであらう。

牛久沼を彩つては、枯れ尽した蘆の根を、サツパと呼ぶ扁舟に砕いて渡つた冬を思ひ、五駄沼では桃の春、手賀沼には青蘆伸びて、小さい睡蓮の汀に咲いてゐた夏を偲ぶ。

- ⑨ つたことはちよつと思ひのほかなことであつた。それはたとえば、新しくできた運河に初めて
- ⑩ 水を堰き入れて落したらこうもあらうかと思うやうに、奔流の瀬となり淵となり、また低きに
- ⑪ ついて流るる形は曲行紆余して窮まるところなく、変幻自在の水のあやをなしている。そこに
- ⑫ は貧しい主観でもものの形を描く絵画などでは、しよせん見いだすことのできさうにもない流動
- ⑬ の美しさが感ぜられて、宇宙のおのずからにして成るものは、どうしてこうも無理がなく、わ
- ⑭ だかまりだの、滞りだののない、りっぱな線条が成り立つのかと、青鉛筆の手を控へてしま
- ⑮ く見ほれていたのであつた。
- ⑯ 盤に水をたたえて、墨や紅を水面に落すと色が散る、それへ紙を浮かしてそのあやを写しと

【一八頁】

- ① つたのを、紅流し、または墨流しと云つて、古くから料紙に使われている。地図をいろどる水
- ② 文はあたかもそれによく似ている。
- ③ 飛行機から撮つた写真には、この水流が真っ白に写つていて、曲線の巧みをおもしろく見せ
- ④ ているが、これは卓上に地形図をながめるよりさらにほんもの大観に接するのだから何層倍
- ⑤ の美を感じ得るわけで、飛行機の旅をした人には、いまさら色鉛筆で水流を絵どつて、流れの
- ⑥ 美しさをたたえるの迂を笑われるかも知れない。
- ⑦ 総武の平野には大小あまたの湖沼がある。小さいのは忘れ水のように、大きいのは湖がかえ
- ⑧ つて島のやうに見えるのもある。柄鏡を落したやうに小さく見えるところにも、地図に載つて
- ⑨ いるほどならば、舟を浮かべるには足るのであらうし、明かるい月も飛ぶ雲も、影を水の面に
- ⑩ 映すのであらう。
- ⑪ 牛久沼をいろどつては、枯れつくしたあしの根を、「さつぱ」と呼ぶ扁舟に砕いて渡つた冬
- ⑫ を思ひ、五駄沼では桃の春、手賀沼には青あし伸びて、小さいすいれんのみぎわに咲いていた
- ⑬ 夏をしのぶ。

嘗つて立ちつくしたあたりには、地上に記し留めるやうに赤い鉛筆で強く円を描く。

現代の東京人には、小梅だの、亀井戸だの、向島だの、柳島だのが風流を愛する人々の理想の住宅地とされてゐたことは、思ひも及ばないところであらう。東郊一带を葛飾の里と呼んで、

本所の住人北斎はその葛飾を姓にしてゐるが、その他にもそこらあたりに住んで、葛飾の隠士何某などと得意に号してゐる江戸のいはゆる遊民も少なくない。

さう云へば今時その地を探ねて、地図を彩る私なども、若し文化、文政に生を享けてゐたとしたら、たぶんその隠士仲間へはいつて、真間の継橋の畔かなんかに、蘆の慮でも結んでゐたかも知れない。

江戸名所図会には、今の江戸川を利根川と称へて、古称太井河、かつしかの川などとは記してゐるが、江戸川としてあるところは一つもない、今では川の東つまり千葉県下が東葛飾郡であり、川の西が北葛飾郡と、大東京に入る葛飾区と江戸川区になつてゐる。

東葛飾は東京の東北に鳥が翼を拡げたやう

に伸びてゐるが、その右の翼の末に近い手賀沼……我孫子の宿と、その左の翼のこれも末の方の中里……五駄沼までは行つた

⑭ かつて立ちつくしたあたりには、地上にしるしとどめるやうに赤い鉛筆で強く円を描く。

⑮ 現代の東京人には、小梅だの、亀井戸だの、向島だの、柳島だのが風流を愛する人々の理想の住宅地とされていたことは、思ひも及ばないところであらう。東郊一带を葛飾の里と呼んで、

【一九頁】

① 本所の住人北斎はその葛飾を姓にしているが、
② そのほかにもそこらあたりに住んで、葛飾の隠
③ 士何某などと得意に号している江戸のいわゆる
④ 遊民も少なくない。

⑤ そういえば今時その地を尋ねて、地図をいろ
⑥ どる私なども、もし文化・文政に生をうけてい
⑦ たとしたら、多分その隠士仲間へはいつて、真
⑧ 間の継橋のほとりかなんかに、あしのいおりで
⑨ も結んでゐたかも知れない。

⑩ 江戸名所図会には、今の江戸川を利根川と唱
⑪ えて、古称太井河、かつしかの川などとはしる
⑫ しているが、江戸川としてあるところは一つも
⑬ ない。今では川の東、つまり千葉県下が東葛飾
⑭ 郡であり、川の西が北葛飾郡と、大東京にはい
⑮ る葛飾区と江戸川区になつてゐる。

【二〇頁】

① に伸びているが、その右の翼の
② 末に近い手賀沼……我孫子の宿
③ と、その左の翼のこれも末の方
④ の中里……五駄沼までは行つた

ことがある。もう少し伸ばせば宝
珠花、もうちつと行けば大利根

と江戸川の分れる関宿まで行
つて見たいと思つてゐる。北葛

飾では粕壁から江戸川縁へ出

る西金野井まで行つてゐるが、こつちの方角では佳景の地かどう
だか知らないが、荒川放水路の出来るまで秋になつて長雨が続き
と、この分ぢやア権現堂が危い……と、東京人の脅威になつてゐ
たその権現堂の堤、どんなところだかそれが見たい。

この土手が切れると江戸の町中は洪水になつたといふ。水に遭
つた故老の語りぐさに度々聴かされてゐるので、浜町河岸で二年
つゞて出水に遭つた時に「権現堂の堤危ふし」と新聞に出たのを見
て古い伝説が新しく現実にぶつかつた氣のしたこともある。

私は水文を彩りながらも、大利根と江戸川の分れる関宿の分岐
点から始まつて、古利根の下流中川となつて放水路に落ち合うま
で、この川筋に興味が惹かれる。

中川は昔から東京を出て一ばん近く田舎の川らしい野趣の多か
つたところ、今東京市の中へはいつてもさのみ昔に変わらない。さ
らに溯つて古利根と呼ばれる埼玉分になると、川幅も狭まつてそ
れが一層鄙びてくる。

そこいらの流れを青く彩ると、川縁の土手に埃が白く立つて、
緑の蘆の葉ずれ、葦切が啼いて、そんな景色がまざまざと瞭に泛
ぶ。

⑤ ことがある。もう少しのせば宝

⑥ 珠花、もうちつと行けば大利根

⑦ と江戸川の分かれる関宿まで行

⑧ つて見たいと思つてゐる。北葛

⑨ 飾では粕壁から江戸川べりへ出

⑩ る西金野井まで行つてゐるが、

⑪ こつちの方角では佳景の地かどうだか知らないが、荒川放水路の出来るまで秋になつて長雨が

⑫ 続くと、この分ぢやア権現堂があぶない……と、東京人の脅威になつてゐたその権現堂の堤、

⑬ どんなところだかそれが見たい。

⑭ この土手が切れると江戸の町じゆうは洪水になつたという。水にあつた故老の語りぐさにた

⑮ びたび聞かされてゐるので、浜町河岸で二年続いて出水にあつた時に、「権現堂の堤危うし」

⑯ と新聞に出たのを見て、古い伝説が新しく現実にぶつかつた氣のしたこともある。

【二一頁】

① 私は水文をいろどりながらも、大利根と江戸川の分かれる関宿の分岐点から始まつて、古利

② 根の下流中川となつて放水路に落ちあうまで、この川筋に興味がひかれる。

③ 中川は昔から東京を出ていちばん近く、いなかの川らしい野趣の多かつたところ、今東京市

④ の中へはいつてもさのみ昔に変わらない。さらにさかのほつて古利根と呼ばれる埼玉分になる

⑤ と、川幅もせばまつてそれがいつそひなびてくる。

⑥ そこいらの流れを青くいろどると、川べりの土手にほこりが白くたつて、緑のあしの葉ずれ、

⑦ よしきりが鳴いて、—そんな景色がまざまざとまぶたに浮かぶ。

—「蘆の芽」による—

原典と教科書教材本文との異同を確認する。テキスト化に際しての疑問点、
問題は、後に記す「タイトル」「語句・表現」の項で合わせて論じることと

する。尚、()内は原典『蘆の芽』の表記。【 】内は教科書教材本文の頁・
行数をそれぞれ表す。

(1) 原典では漢字表記であったにもかかわらず、教科書ではひらがな表記となっている。

- ・地図をいろどる(地図を彩る)【一六 タイトル】
- ・食事をすませてから(食事を済ませてから)【一六①】
- ・手元近くまでおろして(手元近くまで下して)【一六①】
- ・大きい食卓の上にひろげた(大きい食卓の上に拡げた)【一六②】
- ・色鉛筆でいろどりはじめた(色鉛筆で彩りはじめた)【一六②】
- ・かたわらで夕刊を読みながら(傍で夕刊を読みながら)【一六③】
- ・いっしょに(一緒に)【一六④】
- ・まるで(恰で)【一六④】
- ・そのうちの一枚を(その内の一枚を)【一六④】
- ・静脈と動脈とも(静脈と動脈交々)【一六⑤】
- ・ごときをたどってながめて(如きを辿って眺めて)【一六⑥】
- ・言われてみれば(云はれて見れば)【一六⑦】
- ・まことに(寔に)【一六⑦】
- ・うそにも(嘘にも)【一六⑦】
- ・なんのなにがし(何の某)【一六⑦】
- ・いわれるものが(云はれるものが)【一六⑦】
- ・はみ出さない(食み出さない)【一六⑧】
- ・おぼつかなく(覚束なく)【一六⑧】
- ・なすりつけてゆく(擦りつけてゆく)【一六⑧】
- ・およそ(凡そ)【一七①】
- ・ちがいあるまい(違ひあるまい)【一七①】
- ・しかし(併し)【一七①】
- ・当人にしてみれば(当人にして見れば)【一七②】
- ・鉛筆をもてあそんで(鉛筆を弄んで)【一七②】
- ・近ごろ(近頃)【一七③】

- ・興味をひかれて(興味を惹かれて)【一七③】
- ・デパートで買ってきた(デパートで買って来た)【一七④】
- ・武蔵・下総・常陸にわたる(武蔵・下総・常陸に亘る)【一七④】
- ・まず(先づ)【一七⑤】
- ・水陸のわかち(水陸の別かち)【一七⑤】
- ・しるしづけていったのだが(印づけて行ったのだが)【一七⑦】
- ・わずかに(僅かに)【一七⑦】
- ・にわか(俄に)【一七⑧】
- ・いきいきとしてきて(生き生きとして来て)【一七⑧】
- ・墨刷り(墨摺)【一七⑧】
- ・まるで(恰で)【一七⑧】
- ・思いのほかなことであった(思いの外なことであった)【一七⑨】
- ・それはたとえば(それは譬へば)【一七⑨】
- ・新しくできた(新しく出来た)【一七⑨】
- ・運河に初めて水を(運河に始めて水を)【一七⑨】
- ・水のあや(水の文)【一七⑪】
- ・しよせん(所詮)【一七⑫】
- ・できそうにもない(出来さうにもない)【一七⑫】
- ・おのずから(自づから)【一七⑬】
- ・どうしてこうも(どうして恚うも)【一七⑬】
- ・わだかまりだの、滞りだのない(蟠りだの、滞りだのない)【一七⑬】
- ・りっぱ(立派)【一七⑭】
- ・見ほれて(見惚れて)【一七⑮】
- ・水をたたえて(水を湛へて)【一七⑯】
- ・そのあやを(その文を)【一七⑯】
- ・地図をいろどる(地図を彩る)【一八①】
- ・あたかも(宛も)【一八②】

- ・とった写真(撮った写真)【一八③】
- ・まっ白(真つ白)【一八③】
- ・おもしろく(面白く)【一八③】
- ・地形図をながめる(地形図を眺める)【一八④】
- ・さらに(更に)【一八④】
- ・いまさら(今更)【一八⑤】
- ・美しさをたたえる(美しさを讃へる)【一八⑥】
- ・かもしれない(かもしれない)【一八⑥】
- ・かえって(却って)【一八⑦】
- ・舟を浮かべる(舟を遊ぶ)【一八⑨】
- ・牛久沼をいろどって(牛久沼を彩って)【一八⑪】
- ・枯れつくした(枯れ尽した)【一八⑪】
- ・あしの根(蘆の根)【一八⑪】
- ・青あし(青蘆)【一八⑫】
- ・すいれん(睡蓮)【一八⑫】
- ・みぎわ(汀)【一八⑫】
- ・夏をしのぶ(夏を偲ぶ)【一八⑬】
- ・かつて(嘗つて)【一八⑭】
- ・しるしとどめる(記し留める)【一八⑭】
- ・そのほか(その他)【一九②】
- ・そういえば(さう云へば)【一九⑤】
- ・地図をいろどる(地図を彩る)【一九⑤】
- ・もし(若し)【一九⑥】
- ・生をうけて(生を享けて)【一九⑥】
- ・ほとり(畔)【一九⑧】
- ・あしのいおり(蘆の廬)【一九⑧】
- ・かもしれない(かもしれない)【一九⑨】

- ・しるして(記して)【一九⑪】
- ・大東京にはいる(大東京に入る)【一九⑭】
- ・翼をひろげた(翼を拡げた)【一九⑯】
- ・のせば(伸せば)【二〇⑤】
- ・行ってみたい(行つて見たい)【二〇⑦】
- ・江戸川べり(江戸川縁)【二〇⑨】
- ・できるまで(出来るまで)【二〇⑪】
- ・あぶない(危い)【二〇⑫】
- ・町じゅう(町中)【二〇⑭】
- ・水にあった(水に遭つた)【二〇⑭】
- ・たびたび(度々)【二〇⑮】
- ・出水にあった(出水に遭つた)【二〇⑯】
- ・興味がひかれる(興味が惹かれる)【二一②】
- ・いちばん(一ばん)【二一③】
- ・田舎(いなか)【二一③】
- ・さかのぼつて(溯つて)【二一④】
- ・せばまつて(狭まつて)【二一⑤】
- ・いっそう(一層)【二一⑤】
- ・ひなびて(鄙びて)【二一⑤】
- ・青くいろどると(青く彩ると)【二一⑥】
- ・川べり(川縁)【二一⑥】
- ・ほこり(埃)【二一⑥】
- ・あしの葉ずれ(蘆の葉ずれ)【二一⑥】
- ・よしきり(葦切)【二一⑦】
- ・まぶた(瞼)【二一⑦】
- ・浮かぶ(泛ぶ)【二一⑦】

(2) 原典での漢字表記が、教科書では別の漢字表記がなされている

- ・糸筋(縷)【一六⑤】
- ・言われて(云はれて)【一六⑦】
- ・墨一色刷り(墨一色摺)【一七④】
- ・川の流れ(河の流れ)【一七⑤】
- ・道(路)【一七⑥】
- ・形を描く絵画(形を画く絵画)【一七⑫】
- ・迂を笑われる(迂を嗤はれる)【一八⑥】
- ・その地を尋ねて(その地を探ねて)【一九⑤】
- ・利根川と唱えて(利根川と称へて)【一九⑩】
- ・聞かされて(聴かされて)【二〇⑮】
- ・鳴いて(啼いて)【二一⑦】
- ・浮かぶ(泛ぶ)【二一⑦】

(3) 原典ではひらがな表記であったにもかかわらず、教科書では漢字表記となっている。

- ・写しとったのを(うつしとったのを)【一七⑯】
- ・絵どって(ゑどつて)【一八⑤】
- ・流れ(ながれ)【一八⑤】
- ・明るい(あかるい)【一八⑨】
- ・多分(たぶん)【一九⑦】

(4) 原典ではカタカナ表記であったものが教科書ではひらがな表記となっている。

・「さっぱ」(サツパ)【一八⑪】

(5) 原典の記述を教科書本文では省略したり、書き換えたりしている箇所が見られる。

- ・変幻自在の水のあやをなしている。そこには貧しい【一七⑪】
- (変幻自在の水の文、それは貧しい)
- ・美しさが感ぜられて(美しさを感じて)【一七⑬】
- ・舟を浮かべる(舟を泛ぶ)【一八⑨】

(6) その他

- ・この分じゃあ(この分ぢゃア)【二〇⑫】
- ・「権現堂の堤危うし」(「権現堂の堤危ふし」)【二〇⑮】
- ・鳴いて、—そんな(啼いて、そんな)【二一⑦】

五 大意・文章構成

1 大意

ある晩、手すさびに、清方は武蔵・下総・常陸の三国にわたる五万分の一の地図に赤鉛筆と青鉛筆で彩色を施す。川・湖水・沼など、水の部分を青鉛筆で彩り、曾遊の道や地点を赤鉛筆で印をつけた。地図の表はにわかにいきいきと躍動し、天工の妙に清方は感動する。眺めているうちに、かつて訪れた地での思い出が浮かぶ。自分の目でまだ見たことがない地に心がひかれる。懐古の情は古人をしのび、古書にも及ぶ。また、時代の変遷にも心は打たれるのであった。

2 文章構成

文章構成を次のように大きく二段構成でとらえてみた。

1 (一四①)～一八⑩) 地図を彩り天工の妙に感動する清方

ある晩、五万分の一の地図に赤鉛筆と青鉛筆で彩色を施す。幼げな手さびであるが、鉛筆を弄んでいるわけでもない。川・湖水・沼など、水の部分を青鉛筆で彩り、曾遊の道を赤鉛筆で印つけた。地図の表はにわかにいきいきと躍動し、天工の妙に清方は感動する。地図を彩るところとは古くから料紙に使われる紅流し、墨流しに類似している。飛行機で旅をした人は地図を彩る迂を笑うことだろう。平野にある大小の湖沼は忘れ水や鳥のように見える。

2 (一八⑪)～二二⑦) 地図を彩りその地の情景を儼に浮かべる清方

地図の湖沼を彩り、その場所を思い出す。曾遊の地に赤鉛筆で印をつける。かつて葛飾の里は風流を愛する人の理想の住宅地であった。もしも文化・文政に自分自身が生きていたら、真間の継橋のほとりに住んでいたことであろう。江戸川流域の今と昔に思いを馳せ、その情景が儼に浮かぶのであった。

教師用指導書においては、次のように五段構成でとらえている。

- 1 (一六①)～一七②) 地図をいろどっている筆者の姿
- 2 (一七③)～一八②) 地図をいろどつてみての驚きと感激
- 3 (一八③)～一八⑬) 沼湖についての連想
- 4 (一八⑭)～一九⑨) 隠士・遊民の住んだ土地とそれについての筆者の感想
- 5 (一九⑩)～二二⑦) 葛飾の地形、特にそこにある沼湖と川、そして

水に沿う町や村のこと。つけたりとして権現堂の堤の話。

稿者は二段構成としてとらえ、教師用指導書の「3」の部分に分け目とした。天工の妙に感動する姿と、その地に思いを馳せる姿という内容面から構成をとらえてみたのである。一方で教師用指導書では「3」の部分のように「沼湖についての連想」としてひとまとまりにとらえることも可能であろう。

稿者と教師用指導書の文章構成のとらえ方にずれが生じていることから明らかのように、清方の文章構成を論理的にとらえることはなかなか難しいものがある。稿者も段落の途中で区切りを入れることに違和感がある。しかし、内容面に着目し、分け目を入れるなら妥当であると考えられる。それは、清方の文体に起因するものであると考える。芳賀徹は清方の文体について次のように述べる。

芳賀 それからよく読んでみると、主語、述語の関係なんかは必ずしもそんなにはっきりしていないですね。けさ学生相手に声に出して読んでみたら、途中ですつと本来ならばあるべき一文句二文句がすつ飛ばしてあったり、ぼんと先に進んだりしていますね。

小林 イメージがスライドしていく。

芳賀 そういうことは、いかにも無駄がなくて、スピーディーに感じられて、非常に気持がいいのです。

高階 しかし、意味はわかるわけでしょう。

芳賀 もちろん、かえってよくわかるわけですよ。⁴

清方の文体は、整備されていない部分がある一方で、無駄なくスピーディーで意味も明快だとしている。ある意味では、清方の文章に区切りを入れようとする試み自体が無意味なことであるかもしれない。文章を大きくひとまとまりでとらえ、その流れ、連続性に着目しなければ、清方の文章の価値を見

いだせないかもしれない。

この流れるような筆致を高階秀爾は「語り物の芸術」と評し、三遊亭円朝の影響について言及し、清方の文章を次のように高く評価する。

円朝師匠とはもちろんよく一緒に旅もしていられるし、それからおとうさんが新聞に速記したものを載せるといふ画期的なことをされて、それが大変人気を呼んだわけで、いまや円朝は明治文学全集の中で一冊を占めるなっているわけですね。あれは純文語体でもないし、それから日常会話とももちろん違う。どうも明治以来、言文一致、日常語をそのまま書けばいいという感じがあつて、それが言葉をだんだんだらしくさせていったような気がするけれど、やっぱり高座での語り口みたいなのというものは、日常の話し言葉ではない。これは、

円朝だけではなくて、伝統があつただけでも、そういう一つ筋の通つた骨格がある文章という感じがしますね。

「語り物の芸術」たる清方の文章を論理的に分けるのではなく、文章を大きくとらえ、話題の展開からその構成をとらえることが適切だと思われる。

六 語句・表現

ここでは、教科書本文中の語句・表現についての解説を試みる。

教科書本文には注が施されている。また、教師用指導書においても語句、表現についての解説の記述が見られる。

教科書「国語 高等学校一年上（高等学校第一学年前期用）」東京書籍

教師用指導書 「国語」指導の研究 高等学校一年 全（「国語」研究会 東京書籍 昭和三十二年）

〈一七頁〉

*葛飾＝古くは下総の国の古郡名で、時代によってその地域や区分に変遷を重ねた。現在は東京・千葉・埼玉の三都県に分類している。

*武蔵＝国の名。東京・神奈川・埼玉の三都県にまたがる。

*下総＝*国の名。千葉県の一部、その北に位置する。

*常陸＝国の名。茨城県の大部。

〈一八頁〉

*総武＝上総・下総・武蔵の三国。

◇総武〔ソウブ〕 注参照。
◇忘れ水 野中などを絶え絶えに流れていて、人に知られない水。

◇葛飾〔カツシカ〕 注参照。現在北葛飾郡は埼玉県に、東葛飾は千葉県に属し、南葛飾は東京都に編入されている。
◇武蔵〔ムサシ〕 注参照。

◇下総〔シモウサ〕 注参照。古くは総の国の一部で、シモツフサと読んだ。これに対して上総の国をカミツフサと読んだ。

◇常陸〔ヒタチ〕 注参照。

<p>*牛久沼 茨城県稲敷郡にある細長い沼。長さ約八キロメートル。</p>	<p>◇牛久沼〔ウシクヌマ〕 注参照。</p>
<p>*五駄沼 千葉県東葛飾郡にある沼。面積〇・二平方キロ。</p>	<p>◇扁舟〔ヘンシユウ〕 小舟。</p> <p>◇五駄沼〔ゴダヌマ〕 注参照。</p>
<p>*手賀沼 千葉県東葛飾郡にある沼。面積約十二平方キロ。</p>	<p>◇手賀沼〔テガヌマ〕 注参照。</p>
<p>*小梅 東京都墨田区小梅。</p>	<p>◇小梅〔コウメ〕 注参照。墨田川に近く、江戸時代には文人墨客の好んで住んだ所。</p>
<p>*亀井戸 東京都江東区亀戸。</p>	<p>◇亀井戸〔カメイド〕 注参照。もと武蔵の国南葛飾郡の町。現在は亀戸と書く。この地で有名な亀戸天神は菅原道真を祭り、かつてはふじの花の名所であった。付近に名高い梅の名所もあって、明治のころまで、この辺は風流人のつえを引く所となっていた。</p>
<p>*向島 東京都を貫流する隅田川の東岸の地。現在墨田区内。</p>	<p>◇向島〔ムカウジマ〕 注参照。詩人墨客の清遊の地として江戸時代から有名であり、また桜の名所として知られた。向島の名は、対岸浅草方面から川向こうに見える意である。</p>
<p>*柳島 東京都墨田区内。</p>	<p>◇柳島〔ヤナギシマ〕 注参照。</p>
<p>〈一九頁〉 *本所 東京都墨田区の一部。</p>	<p>◇本所〔ホンジョ〕 注参照。</p>
<p>*北斎 葛飾北斎〔一七六〇—一八四九〕浮世絵師。版画・肉筆画ともにすぐれていた。</p>	<p>◇北斎〔ホクサイ〕 注参照。浮世絵師。写実を離れた主題の強い作家。題材としてはあらゆるものを扱ったが、特に有名な作品は風景画である。有名な作品としては、「富嶽三十六景」「諸国名勝奇覽」「東海道五十三次」などがある。</p>
<p>*真間の継橋 千葉県市川市真間にあったという。万葉集卷十四に見える。</p>	<p>◇文化・文政〔ブンカ・ブンセイ〕 年号。文化は一八〇四—一八一八年。文政は一八一八—一八三〇年。江戸末期の文化の栄えた時代。</p> <p>◇真間の継橋〔ママのツギハシ〕 注参照。国府台のはずれにある弘法寺付近にあったという。万葉集卷十四に「足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通わむ」の歌がある。</p>

<p>* 江戸名所図会 七巻。二十冊。一八三六（天保七）年刊。斎藤幸雄選。長谷川宗秀絵。江戸およびその近郊の神社・仏閣・名勝・旧跡を説明したもの。</p> <p>* 江戸川 利根川の分流。江戸時代から水運利用が多かった。</p>	<p>◇ 江戸川（エドガワ） 注参照。千葉県東葛飾郡関宿町で利根川の本流に分かれ、埼玉県から東京都の東境を経て東京湾に注ぐ。</p>
<p>〈二〇頁〉</p> <p>* 我孫子 千葉県東葛飾郡我孫子町。</p>	<p>◇ 我孫子（アビコ） 注参照。常磐線の一駅で、ここから成田線が分かれる。</p>
<p>* 中里 同郡川間村内。</p>	<p>◇ 中里（ナカザト） 注参照。</p>
<p>* 宝珠花 千葉県北葛飾郡庄和村内。</p>	<p>◇ 宝珠花（ホウジユバナ） 注参照。</p>
<p>* 関宿 千葉県東葛飾郡関宿町。</p>	<p>◇ 関宿（セキヤド） 注参照。千葉県東葛飾郡の西北端にある町。利根川と江戸川に分かれる所にある。</p>
<p>* 粕壁 埼玉県春日部市。</p>	<p>◇ 粕壁（カスカベ） 注参照。春日部というのは、近ごろ改称されたもので、ふじの花の名所として知られている。</p>
<p>* 西金野井 同県北葛飾郡庄和村内。</p>	<p>◇ 西金野井（ニシカナノイ） 注参照。</p>
<p>* 荒川放水路 東京都の水害を防ぐため荒川から分流させた水路。</p>	<p>◇ 荒川放水路（アラカワホウスイロ） 注参照。</p>
<p>* 権現堂 埼玉県北葛飾郡幸手町内。熊野権現の社がある。</p>	<p>◇ 権現堂（ゴンゲンドウ） 注参照。</p>
<p>* 浜町河岸 東京都中央区浜町の隅田川に臨むあたりの呼び名。</p>	<p>◇ 浜町河岸（ハマチヨウカシ） 注参照。</p>
<p>〈二二頁〉</p> <p>* 古利根 古利根川のこと。利根川の一分流。</p>	<p>◇ 古利根（フルトネ） 注参照。利根川の分流で、埼玉県北埼玉郡原道村の辺から起り、杉戸町・春日部町を経て東京都に入り、江戸川・綾瀬川・中川に通ずる。もとは、これが利根川の本流であったともいわれる。</p>
<p>* 中川 東京都江東区を流れる川。</p>	<p>◇ 中川（ナカガワ） 注参照。東京都葛飾区に流れる川。古利根の三分流のうち、中央に位置するゆえの呼称といわれる。</p>
<p>* 東京市 現在の東京都区内</p>	
<p>* よしきり ウグイス科の小鳥。夏アシ原に巢を営む。行行子。</p>	<p>◇ よしきり（葦切） 注参照。</p>

教科書本文を学習する上で、右記に整理した注、教師用指導書の記述以外にも解説を加える必要のある語句もあれば、それだけでは説明が不十分なものも見られる。ここにそれらの語句を掲げるとともに、特徴的な表現をあげ、さらに解説を加える⁷⁾。

■ある晩珍しく約束の客もないので、早く食事を済ませて【一六①】
「ある晩珍しく約束の客もない」とあるから、日常は自宅への来客が多くあったこと意味する。清方の一日の生活の様子を山田肇は次のように記している。

清方のその日その日の生活の形は基本的には永い間一貫して変らなかつたやうである。

朝は割合早く起きて、口を漱ぐと、東の空に向つて拝をし、神棚を拜んでから、妻と共に朝食を摂る。終ると、前掛けを掛けて画室に入り、あとは昏くなるまで、やはり妻と共に昼食を摂りお八つを食べる間だけ出てくるほかは、ずっと画室にゐる。入浴して夕食後、夜はまつたく仕事はしない。多くは読書に充てるが、夜更しはしない。

これが、晩年鎌倉に住むやうになつてからの清方の毎日の生活で、当時私は隣家に住むやうになつたから、それはよく知つてゐる。

それ以前、清方がまだ東京を離れなかつた間の毎日の生活は、それほどよく知つてゐるわけではないが、それでも私が昭和七年に清方の長女である亡妻と結婚してからのことは、ほほわかつてゐる。当時も清方の毎日の生活は基本的な形においては晩年と異なるところはなかつたやうに思ふ。

それは、私の知らない時分からのことらしい。(中略) 清方の毎日の生活の基本的な形は、大正の初め、三十代の後半に清方が、挿絵の業を廃し、自由制作に専心するやうになると既に定まつたもののやうである。それ以来、昭和四十七年に数え年九十五歳で生を終へるまで、

随分永い間一貫して変らなかつたものである。

山田肇「あとがき」(『籙木清方文集 四 春夏秋冬』白風社 昭和五十四年(一九七九)三月 二一五—二一六頁)

●数枚の五万分の一の地形図【一六②】

清方は『江戸名所図会』に取り上げられた場所を当時の地図をもとに遍歴したという。清方の随筆「古跡」(昭和三十四年(一九五九一月))に次のように記されている。

私が牛込の矢来に居た頃には、月岑や雪且が草履で歩き廻つたあとを、武蔵野、隅田、葛飾と、陸地測量部、五万分の一の地図を道しるべにして、時の許す限り、タクシーに拠つて遍歴した。

『籙木清方文集 五 名所古跡』(白風社 昭和五十四年(一九七九)二月) 九三頁)

本文の「地図を彩る」を発表したのが昭和十三年(一九三八)三月であるから、清方が「牛込の矢来に居た頃」と重なることがわかる。

●かたわらで【一六③】

物や人のそば近くで。何かに近接して。そばで。すぐ近くで。原典では「傍」と漢字表記がなされている。教科書では「かたわら」と訓じているが、「そば」「わき」「はた」と訓じる可能性も否めない。

●こもごも【一六⑤】

(中世までは「こもごも」互いに入れかわつて。互いに入れ替わるさま。かわるがわる。つきつきに。互いに。次々に現れてくるさま。古くは、漢文訓読に用いられた。かたみに。多くのものが入り混じっているさま。

■うそにも絵の道でなんのなにがしとかいわれるもの【一六⑦—⑧】

大正八年（一九一九）より第一回から帝展の審査員をつとめ、昭和十二年（一九三七）芸術院会員となった清方は、当時、十分に「絵の道」において名の知れた人物であった。清方の謙虚さがあふれる部分である。

●なすりつけて【一六⑧】

原典では「擦りつけて」と表記されている。「なすりつけて」と訓じているが、「すりつけて」「こすりつけて」「ぬすりつける」と訓じる可能性も否めない。

●およそ【一七①】

（「おおよそ」の変化した語）判断の内容や物事の量の、正確ではないがそれに近いところ。物事のだいたいのところ。おおまかなところ。あらかた。ほとんど全部。大要。あらまし。

●東郊【一七③】

都城の東方の野。ひがしの郊外。都市の東の郊外。また、その地域。「葛飾」は東京の東に位置し「東郊」に合致する。

●葛飾【一七③】

東京都・千葉県・埼玉県にまたがる江戸川流域一帯の古地名。旧郡名。可豆思加、勝鹿、葛餅などと書かれた。『万葉集』一四・三三四九にも「葛飾の真間の浦廻を漕ぐ船の船人騒く波立つらしも」と詠まれた歌枕の地である。古くは下総国に属し隅田川以東の地をさしていた。中世になり太井川（現江戸川）を境として以東は葛東、以西は葛西とよばれ、葛東には下河辺氏、葛西には葛西氏の各地方豪族が居住、その最盛時の勢力範囲は、遠く群馬県邑楽郡、栃木県都賀郡、茨城県古河市から相馬郡に及び、関東平野の中央部を占めていた。江戸時代、葛東は下総葛飾、葛西は武蔵葛飾とよばれ、江戸川

をもって境界となした。明治十三年（一八八〇）下総葛飾は西・中・東、武蔵葛飾は北・南の各葛飾郡に分かれたが、明治二十六年（一八九六）西葛飾郡は茨城県猿島郡へ、中葛飾郡は北葛飾郡へ併入された。こうして北葛飾郡は埼玉県、東葛飾郡は千葉県に、南葛飾郡は東京都（その一部が葛飾区）に分かれた。

沢田清「葛飾」（『日本大百科全書』）

■近ごろ私は東郊葛飾一帯にひどく興味をひかれている【一七③】

『鐫木清方文集 五 名所古跡』の「あとがき」に山田肇は次のように記している。

書かれてある土地は、清方が、西南戦争の翌年に生れてから、関東大震災があつて後程なく山の手へ移るまで、ほぼ半世紀の間続けた、東京下町の至極平凡な日常生活の圏内にあつた土地が大部分である。

（二六五頁）

本書に集めた諸篇において書かれてある土地は、『江戸名所図会』において採られてある土地以外に出ることは少ない。のみならず、これらの土地の多くは、隅田川の東西両岸に集中してあるのである。従つて、本書の第二、三、四部に収められてある諸篇は、隅田川両岸の諸所に関して書かれたものになつてあるが、その点もまた、『江戸名所図会』において、隅田川両岸に、全七巻のうち二巻が充てられてあるのに似てゐるかも知れない。（二六六頁）

清方は、大正十五年（一九二六）四十八歳のときまで「東京下町」に住む。牛込・矢来町に転居し、初めて自分の持ち家に住むことになる。この文章「地図を彩る」を執筆したのが昭和十三年（一九三八）六十歳であるから下町への思いが地図を彩らせ、この文章を書かせたのであろう。

清方は、「東郊の思ひ出」（大正十四年（一九二五）四月）に「葛飾」という名への思いを次のように記している。

東郊の郊外の中で一ばん幅の利いた東郊は今では全く廃頽して、葛

飾といふ名が齎らず懐かしみも、現代人にはもう解されなくなつてしまつた。〔『鐫木清方文集 五 名所古跡』六六頁〕

大正十四年（一九二五）の段階で「東郊葛飾」の地が大きく変貌していることが窺える。同じく「東郊の思ひ出」に次のような記述が見られる。

既に工場地となる運命を与えられてから歳久しく、破壊し尽くされた東郊はもう昔を今にするよしもない。

〔『鐫木清方文集 五 名所古跡』六九頁〕

清方が地図を彩るのも、かつての葛飾への思いがあることがうかがえる。

●武蔵【一七④】

（古くは「むざし」）旧国名の一。東海道十五か国の一国。古くは無邪志国・胸刺国・知々夫国の三国造が置かれたが、大化改新後武蔵一国となり、初めは東山道に属していた。宝龜二年（七七二）東海道の一国となる。鎌倉時代には関東御分国、北条氏が国司・守護職を兼帯。室町時代には初め鎌倉公方足利氏、後、関東管領上杉氏、戦国時代には北条氏が支配。天正一八年（一五九〇）徳川家康の江戸入府後は、藩領・幕領・旗本領に分かれた。明治四年（一八七二）の廃藩置県後、一府八県が置かれたが、のち埼玉県・東京府・神奈川県に分割統合された。現在の東京都と埼玉県のほぼ全域に神奈川県の一部を含めた地域。武州。

●下総【一七④】

（古くは「しもつふさ」、これに対して上総の国を「かみつふさ」と呼んだ）旧国名の一。東海道十五か国の一国。大化二年（六四六）総国が二分されて成立。鎌倉・室町時代を通じて千葉氏が守護、江戸時代は小藩が分立。明治四年（一八七二）の廃藩置県により印旛・新治の二県が成立し、明治八年（一八七五）大部分は千葉県、一部は茨城県南部となる。北総。

●常陸【一七④】

東海道十五か国の一国。大化改新後に、高（多珂）・久自（久慈）・仲（那賀）・新治・筑波・茨城の六か国を統合して一国となる。南北朝・室町時代は佐竹氏が守護、江戸時代は水戸藩ほか一二藩に分立。廃藩置県後、茨城県と新治県とに分かれたが、明治八年（一八七五）合併して茨城県の北東部を占める。常州。尚、教科書注の「茨城」には「いばらぎ」とルビが施されている。

■こうしてわずかに水のあるところを明らかにしただけで……青鉛筆の手を控えてしばらく見ほれていたのであつた【一七⑦―⑮】

清方が、水の部分を青鉛筆でわずかに塗っただけでにわかに躍動しだす。地図の姿に驚異を感じ、天工の妙への長嘆がよく表われている。人間による絵画はあくまでも人工物であり限界がある。清方はそのことを「貧しい主観ものであり、そこには自然がおりなす美が感じられるわけである。「宇宙のおのずからにして成る」自然の偉大さに畏怖するのであつた。

●しるしづけて【一七⑦】

原典に「印づけて」とあるから、曾遊の道を赤鉛筆でマークしたということを示す。

●たとえば【一七⑨】

原典に「譬へば」とあるから、ある事柄を他の事にたとえるときに用い、「物にたとえていえば」の意。「例をあげていえば」の意ではない。

●堰き入れて【一七⑩】

「堰き入れる」で、水の流れをせきとめて、他へ導き入れる。せきる。

●奔流【一七⑩】
激しい勢いで流れること。また、勢いの激しい流れ。奔湍。

●瀬【一七⑩】
川などの流れが浅く歩いて渡れる所。歩いて渡れる程度の浅い流れ。浅瀬。あさせ。

●淵【一七⑩】
水がよどんで深くなった所。底が深く水がよどんでいる所。川の流れが滞って、深く水をたたえたところ。

●曲行紆余【一七⑪】
「曲行」は曲がりくねって行くこと、曲がり曲がって行くこと。「紆余」については、「紆」も「余」も、川や丘などが屈曲するさまをいい、うねり曲がること。曲がりながら続くこと。うねり曲がっていること。

●変幻自在【一七⑪】
思うままに姿を変えて、現れ消えること。出没や変化が自由自在なこと。また、そのさま。

●水のあや【一七⑪】
水のもよう。いろどり。美しさ。見事さ。おもむき。

■わだかまりだの、滞りだのない【一七⑬】
リズム感があり、巧みな対句表現である。原典では「蟠りだの、滞りだの」とあり、文筆における清方の表現意識がうかがえる。

●線条【一七⑭】
せんとすじ。せん。すじ。

●手を控えて【一七⑭】
「手を控える」で「物事をするのをさしひかえる。ひかえめにする。」

注

- 1 『釧路論集』第四十二号 北海道教育大学釧路校 平成二十二年(二〇一〇)十一月 一―四頁
- 2 『北海道教育大学紀要』(教育科学編)第六十三卷第一号 北海道教育大学 平成二十四年(二〇一三)八月 一―四頁
- 3 尚、「」内の()数字は、「教材」地図をいろどる」考(1)、「教材」地図をいろどる」考(2)の末尾数字をそれぞれ示すものである。
- 4 芳賀徹・高階秀爾・小林忠・山田肇「討論 清方の文章(上)」『清方文集 月報4』白鳳社 昭和五十四年(一九七九)八月 四頁(尚、この討論は昭和五十三年(一九七八)九月十六日、鎌倉で行われたものである。)
- 5 注4 芳賀徹・高階秀爾・小林忠・山田肇「討論 清方の文章(上)」四頁
- 6 注4 芳賀徹・高階秀爾・小林忠・山田肇「討論 清方の文章(上)」四頁
- 7 【一】内の漢数字は教科書本文の頁、丸数字は行を示すものである。以下同様。尚、教科書本文については、注1佐野比呂巳「教材」地図をいろどる」考(1)の稿末に附した。

※ 本稿は、引用に際し、適宜旧字を新字に改めた。

※ 本稿は、科研費・基盤研究(C)(23531235)による成果の一部である。

(釧路校・准教授)